

## 養蚕の鼠害と新田猫絵

東京農工大学農学部蚕学研究室

准教授 横山 岳

## 新田義貞

筆者の勤める東京農工大学農学部は「東京」と付いているが東京西部の多摩（府中市）にある。多摩はのんびりした所であり、地方から進学した学生は「折角、東京の大学に来たのに・・・」とガックリしている。一体何を期待していたのかわからないが、確かに県庁所在地から来た学生から見ると農工大の周りは地元より遊ぶ所もなく刺激が少ないのだろう。逆に遊ぶ所が少ないためか保護者の評判はなかなか良い。多摩は昔からのんびりした風土らしく、多摩出身の有名人は、あまり頭に浮かばない。源平の合戦の坂東武者達、そして時代がずっと下がって新撰組の近藤勇や土方歳三くらいだろうか。

有名人は出ていないが、日本史に残る「分倍河原ぶばいがわらの合戦」が府中市で行われている。鎌倉時代末期（1333年）、新田義貞にったよしただの軍が新田の庄（群馬県太田市下田島あたり）から南下し、所沢市小手指こてさしで初めて鎌倉幕府軍と衝突（やや幕府軍が優勢だったらしい）、数日後の6月27日（旧暦5月15日）、府中市分倍河原あたりで鎌倉幕府軍に大勝したことで有名である（図1）。分倍河原は坂の下、多摩川を背にしており、鎌倉幕

府軍は何故此处で戦ったのかと思ったが、近くの大國魂神社おおくにたまと国分寺辺りが当時の武蔵の国の中心地であり、武蔵の国を防衛するために地の利が悪くても戦いたかったのであろう。国分寺跡から大國魂神社の間の道は国分寺街道とよばれており、農工大はこの道沿いにある。農工大辺りが昔昔の東京の中心地であったかと思うと不思議な感じである。国分寺街道のすこし西側に群馬から鎌倉に通じる鎌倉街道かみつみち（上ツ道）が通っていた。イザと言うとき関東の御家人達はこの道を「イザ、鎌倉」と向かって鎌倉幕府の為に集まったのだが、この時は逆にその鎌倉街道を使って反鎌倉軍が攻めてきたわけである。



図1 JR分倍河原駅前の新田義貞銅像  
顔が南（鎌倉方向）に向いている。

## 鼠薬師如来縁起

新田義貞は分倍河原で大勝した勢いで鎌倉に攻め込み鎌倉幕府を滅ぼし、京都へ登っている。新田義貞と長男は群馬の新田の庄を出て5年、故郷に帰ることなく福井県で戦死している。室町幕府ができて関東は安定せず、新田義貞の次男、三男は足利氏を相手にゲリラ戦を繰り広げることになる。次男義興は優れた武将で、鎌倉を占領したりと暴れまわっていたが、多摩川で畠山国清くにきよに謀殺されている。謀殺された義興の霊を抑えるために大田区が多摩川沿いに新田神社が建立されている。新田神社は東急多摩川線武蔵新田駅むさしにったから徒歩5分位のところにあり（東京都大田区矢口1丁目21-23）、破魔矢の発祥の地としても有名である（江戸時代に平賀源内が破魔矢を考えたそうである）。何故か義興の首塚が大田区から遠く離れた入間市の愛宕神社にある。きっと謀殺した畠山国清の主人である足利基氏もとうじ（足利尊氏四男）が埼玉県入間市辺りに陣地を置いていたために義興の首が入間市に届けられたためだろう。ちなみに愛宕神社は入間市駅から1kmほど、社内には蚕影神社もある（埼玉県入間市豊岡3丁目7-32）。

新田義貞の三男義宗も関東でゲリラ戦を続けていったが、多勢に無勢で戦いから消えていく。埼玉県所沢市にある薬王寺はこの三男義宗が建立したと言われている（所沢市有楽町8-18）。新田軍は鎌倉時代末期から室町時代初期に戦い、その戦死した新田一族たちの怨霊がネズミとなり、農家に被害を与えると江戸時代の所沢辺りでは言

われていた。戦死した新田氏の武士の怨霊（ネズミ）をおさめるには新田義宗の建立した薬王寺にお参りすると鼠除けのご利益があると信仰が広まった。ネズミは蚕や繭を食べるため、養蚕農家も薬王寺にお参りしたそうである。そのため当時は薬王寺ならぬ鼠薬師と呼ばれていた。薬王寺の「鼠薬師如来縁起」では以下のように述べられている。

『武蔵野中、鼠おびたく流行りて、農家に貯置種物穀物を喰い、田畑に仕置もの何によらず荒らしければ、誰となくこれは新田家の従類戦死の人々が怨霊なりけりと沙汰しける。されば当寺の薬師如来こそ、新田家の大将義宗朝臣の守本尊なればとて、遠近の農民願いを掛けるもの、不思議に鼠の愁をまぬかる。それより鼠薬師と称し、さらに農家を守らせ玉らん諸人信仰すれば、田畑を荒らし蚕に付喰う鼠わづらの煩いわづらをのがれしめ給う。それ利益は世人の知るところなり。』

14世紀の戦死者が17世紀に怨霊となってネズミになるというのはよくわからない。よくわからないが、江戸時代新田氏は人気の高い武将だったこと、そして養蚕の鼠害が大きかったことは確かであろう。

## 新田義貞の後裔

新田義貞の長男、次男は若くして戦死していたが、三男義宗の系統が子孫として残っている。新田一族の岩松氏の娘と義宗の子供が新田岩松氏として新田家が續いていくが、新田岩松氏は室町時代後期に戦国大

名化することなく、下克上で領地を失って江戸時代を迎える。岩松氏は領地を失っていたが、徳川家康が江戸に入って来た時に一寸注目されることになる。それというのも、徳川家が幕府を開くには武家の棟梁である「源氏」になる必要があった。新田氏は源氏であり、徳川家は新田氏の支流の得川氏を称し、征夷大將軍となり幕府を開いた。岩松新田氏はその新田氏嫡流<sup>もりずみ</sup>ということで、領地を失っていた岩松守純が家康に呼び出され、家系図の提出を求められた。しかし、家系図を奪われることを恐れた岩松守純は提出を断ってしまい、お家再興にはならなかった。果たして提出した方が良かったのか、しなくて良かったのか。岩松守純は新田の庄にわずか 20 石を与えられ、その後 100 石を追加され、現在の群馬県立太田フレックス高等学校辺りに館を構えた（太田市下田島町 1243-1）。そこで 120 石の高家<sup>こうけ</sup>として江戸時代を過ごすことになる。高家というのは赤穂浪士の敵役で有名な吉良上野介のように、格式高い武士の貴族のようなものである。多くの高家が数千石の領地を持っていた中、岩松氏の 120 石というのは高家の中でも極めて少ない。江戸時代は 1 万石の大名が 200 人の家臣を抱えるのが普通だったようである。岩松氏は記録上家臣が 20 人くらい居たことになっているが、120 石では 2、3 人しか家臣を持ってないので領地の農民に家臣を兼ねてもらっていたり、あまりに家臣が少ないので領地の年貢も近所の代官に頼んで集めてもらっていたそうである。貧乏高家のためお金がなく、江戸時代中期の岩松義寄<sup>よしより</sup>か

ら代々徳純<sup>よしずみ</sup>、道純<sup>みちずみ</sup>、俊純<sup>としずみ</sup>が絵を描くようになる。町人、農民からの所望の絵を描いて苦しい家計の足しにしていた。そして絵の題材として、多くの鼠除けの「猫絵」を描いている。新田氏という貴種の描く猫絵は鼠害のお守りとして大変有り難がられ、養蚕農家は猫絵を図 2 のように掛軸に仕立てて、蚕を飼育している部屋の床の間に猫絵をかけていたようである。



図 2 新田猫絵の掛軸

### 新田猫絵

新田の殿様が描いた猫絵なので「新田猫絵」、鼠除けなので「八方睨み猫」と呼ばれている。当主によって猫の顔は違っているが、だいたい図 3 のように座った猫 1 匹が丸くなっている構図は同じである。きりっとした猫だけでなくとぼけた猫もあり、ほのぼのする。しかし、これで鼠が追い払えるのか一寸心配になる。新田荘歴史資料館では岩松四代の描いた 15 点の「新田猫絵」が所蔵されており、2015(平成 27)年 2 月に群馬県の「ぐんま絹遺産」に登録さ





図3 「新田猫絵」左：岩松徳純筆、右：岩松道純筆

れている。常設展示されているので興味のある方は是非ご覧ください（新田荘歴史資料館：群馬県太田市世良田町 3113-9）。

養蚕では鼠害が大きく、鼠除けの猫絵は多くの養蚕農家から所望され、岩松の殿様は描きまくったようである。特に寛政年間（1790年）以降に猫絵の所望が多くなっていることから、この時期から北関東や信州で養蚕が盛んになったのだろう。岩松徳純が群馬から長野の善光寺詣りに行った際（1813(文化10)年）、1か月の間に約300枚もの絵を描いたとか。そのうち百枚弱が猫絵だったという。1か月に300枚だから単純計算で1日10枚、結構な枚数を描いている。所望した人から猫絵1枚のお札に150疋（疋：お金の単位）、3枚のお札に300疋貰ったことが記録に残っている（1枚おまけだろうか？）。今の金額に直すと、1疋をざっくり120円とすると1枚18,000円位だろうか。庶民が出せない

ことも無い値段だろう。また1か月に300枚描いたとすると500万円位だろうか、実入りとしてもそこその値段だろう。この頃「新田猫絵」が好評だったためか、同じような「猫絵」を描く者が現れるなど、「新田猫絵」の偽物も出回っていたようである。また、各地の神社で鼠除けのお札が配られるようになった（図4）。「新田猫絵」はそれほど好評だったのであろうし、逆に養蚕の鼠害は本当に深刻だったのであろう。

岩松氏は新田氏嫡流であるが、徳川家には**はばか**憚って江戸時代は新田氏を名乗らず、岩松氏を通していた。しかし、絵には「新田源●●」「新田嫡流●●」「新田義貞裔源●●」「新田氏子孫●●」などと記し、「新田」「源」を名乗っている。

江戸時代末期にヨーロッパへ蚕種の輸出が始まると、船内の鼠除けのお札として岩松氏の猫絵が貿易船に持ち込まれた。当時の当主岩松俊純は明治維新後、新田氏に





図4 鼠除けのお札 国立大学法人東京農工大学科学博物館所蔵（常設展示はされていない）

復名するとともに男爵に称される（俊純の娘が元老井上馨かおるに嫁いでいる）。ヨーロッパでは男爵（バロン）が描いた猫絵として珍しがられ、猫絵は「バロンキャット」として人気が出たそうである（ヨーロッパでは俊純は動物愛護家と勘違いされていたとか）。養蚕とは関係ない新田義貞の子孫が蚕のお札を描いて、外国にまで知られるとは何とも不思議な話である。

### 鼠除けのお札

現在、新たに「新田猫絵」は手に入らないが、猫の描かれた鼠除けのお札はいくつかの神社でお受けいただける。その中でも八海山尊神社はつかいさんそんでは常時お受けいただくことができる（図5a：新潟県南魚沼市大崎3746）。それ以外の神社では例祭の時だけだが、鼠除けのお札をお受けいただける。

図5bの鼠除けのお札は、秩父の笠山の頂上にある笠山神社で5月3日、11月23

日の例祭でお受けいただける（埼玉県比企郡小川町腰越こしがえ）。このお札の猫の胸のところには繭こしがえが描かれている。笠山は837mと結構高いが、林道を使うと山頂近くまで車で行くことができる。登山道を20分程登れば山頂の笠山神社だが、結構急坂なのでお気をつけ下さい。神社には猫の銅像が奉納されている。

図5cのお札は、大日神社（埼玉県秩父郡皆野町下田野）で5月5日の例祭でお受けいただける。神社の名前からご神体は大日如来かと思いきや、ご神体は猫の石像である。ご神体が猫とは変わっているので宮司さんに由来を伺ったが詳細は不明とのこと。

図5dは、南部神社の鼠除けのお札である。南部神社は境内に狛犬ならぬ狛猫（猫又権現）が鎮座しているので有名である。例祭は百八灯と呼ばれる夜祭で、その時にお受けいただける（新潟県長岡市森上ながおかしもりあげ）。例祭は毎年5月8日である。ゴールデンウ



図5 現在でもお受けできる猫の描かれた鼠除けのお札  
左から (a) 八海山尊神社、(b) 笠山神社、(c) 大日神社、(d) 南部神社

イクでも土日でもなく、この日に例祭が固定されているのは、この辺りは鎌倉時代後期、室町時代初期に新田氏支流のおおいだの大井田氏の領地であり、新田義貞が討幕のために挙兵した5月8日に新田義貞を偲ぶためにこの日に例祭を催すことになったためとか。また、話が再び新田義貞に辿り着いたので話を終わりにしたいと思う。養蚕のお守りとして鼠除けのお札を是非一枚蚕室に張ってみては如何だろうか。

【参考】

- 1 江戸時代の岩松氏の暮らしについて  
「猫絵の殿様 領主のフォークロア」落合延孝 / 吉川弘文館  
「猫男爵—バロン・キャット」神坂次郎 / 小学館
- 2 新田猫絵についての資料的価値について  
「史料としての猫絵」藤原重雄 / 山川出版社
- 3 新田猫絵の絵本  
「八方にらみねこ」武田英子 (文) 清水耕蔵 (絵) / 講談社
- 4 新田猫絵と養蚕の関係について  
「新田猫と養蚕」板橋春夫 / 民具マンスリー 日本常民文化研究所 (編) 1巻1号 (1968)  
「まゆの国」井上善治郎 / 埼玉新聞社

■横山 岳 (よこやま・たけし) の紹介  
東京農工大学農学部生物生産学科蚕学研究室  
〒183-8509 : 東京都府中市幸町 3-5-8  
TEL : 042-367-5681  
E-mail : ty.kaiko@cc.tuat.ac.jp  
HP : <http://www.tuat.ac.jp/~kaiko>

[シルクレポート 2016.1号 No.46  
【蚕の遺伝 - 外山亀太郎先生 -】の記事訂正]

次の記事に誤りがありました。訂正 (削除) するとともに  
お詫びいたします。

① p.46 の右欄の下から 10 行目

誤 : メンデルの死後、1900(明治33)年に植物で再発見され、再発見に関わった3人の研究者はその業績でノーベル賞を受賞している。

正 : メンデルの死後、1900(明治33)年に植物で再発見された。

② p.48 の右欄の上から 4 行目

誤 : 植物でメンデルの法則を再発見したことでノーベル賞を受賞できるのだから、外山先生が動物で初めて遺伝学の基礎となるメンデルの法則が成り立つことを発見したことはノーベル賞の受賞に値する業績である。

正 : 外山先生が動物で初めて遺伝学の基礎となるメンデルの法則が成り立つことを発見したことはノーベル賞の受賞に値する業績である。